梅下村塾 ⑧⑤

塾長　梅内拓生

「森と水と命の惑星」国際会議

～地域と世界の心と魂を詠む～

（読書と教育）

3月7日（木）の産経新聞朝刊の第1面に「遠い響き近い声　千野境子　教育疎開で町よ再び」が掲載されている。「福島第一原発のある福島県大熊町が約100キロ西の会津若松市へ全町避難して間もなく2年になる。町ぐるみの移転を促したもの、それは教育だ。

食事も十分でない中、子供たちの学業を心配する父母。学校を立ち上げればコミュニティーは存続出来ると信じる町長。そして背中を押されるように、地震発生からわずか1週間で、学校受け入れの自治体探しを開始したのが、武内敏英・同町教育長だった」、それには伏線がある。

実は震災前から「読書の町おおくまで知られた。平成14年に赴任した武内教育長が生徒たちの読書や活字離れに危機感を抱き、朝読（朝の読書）を始めたのである」と述べられている。

現在の電子情報時代には、情報はコンピューターの画面を介して入って来る。この便利なコンピューターを使えば、紙の本の読書は必要がないのではないかという考えが出て来る。もちろん学校教育における読書は名作などを選んで行われる。

文字は、砂、粘土、甲羅、金属、などに刻まれ、木簡や紙に描かれ、紙に印刷され、現在は液晶画面に写されているのである。文字媒体の材質とメッセージの伝わり方は関係がふかいものがある。

例えば近代の紙を媒体とする本からは、紙の匂い、本の装丁、ページの余白などは、いろいろな記憶や思いとつながって来る。即ち、読書は教育上それだけ広くそして深く、時間と空間をつなげる意味を持っているのである。読書は紙を媒体として目で読むが、朝の授業に詩を朗読することも大切であると思う。目と声、読と詠、理と情、の組み合わせが教育に大切であると考える。

早速、今朝にこのことを、大船渡市の教育委員長の佐藤浩一氏と電話で話をした。釜石の大津波で多くの遺体を心をこめて葬って、西田敏行氏主演の映画「遺体」の主人公のモデルである盛小学校、中学校の同級生の千葉淳氏のことにも触れた。

千葉淳氏は小学6年生の朝の授業の宮沢賢治の詩の朗読が自分の生き方に大きな影響をしたといっていた。佐藤浩一氏は大船渡市でも、朝の読書、朗読、詠作を授業に入れる取り組みをしている学校があると話していた。

大船渡市立第一中学校の詠作品の評と千葉淳氏の話しは梅下村塾の㊼～㊶に既に掲載した。気仙地方の教育の伝統にこのような魂が受け継がれていることは嬉しいことである。

平成21年に開催された東海新報社主催の「気仙応援団フォーラム」もこの教育活動につながっていることを感じている。

（教えを国に成す）

中国古典の「大学」に「家を出でずして、教えを国に成す」と言うことが記述されている。「君子は、自分の家から出なくとも国家を教え導くことが出来る。一家を整えた人であれば、その教化は必ず一国におよぶものである」ということである。もちろん君子はそれまでにいろいろな経験をして、自分を修養してきた人である。

気仙地方にもこのような人物（君子）はいるはずである。東海新報に連載中の「澤木興道とヤマキさん」にも、このような教育の情景が浮かんでくる。「梅下村塾」は復興を目指している気仙の地方の若者が、ここから何を学び、何を身につけて、気仙の地域と世界をどのように結びつけるかを教育することを目指している。

孔子は論語に古典の教えと自分が生み出した思想を記述ました。孔子は中国の偉大な教育者であります。孔子は詩経の中で、「詩三百、一言以て之を蔽う、曰く、思い邪なし」と言っております。孔子は二千五百年も前にこの教育思想を実践しておりました。

孔子のような偉大な教育者ではないことは承知の上で、気仙地方と国内外の若者の地域文化価値教育めざし、草の根の俳句、短歌、詩の詠作と評を介して教育活動をおこなってきました。インドや中国の古典、即ち、仏教や儒教や道教の教えは今でも深い自然観と人間観への道案内をしてくれます。日本の古典もそれなりのものは持っております。しかし、日本の古典、特に詩歌には、自然と人間との関係の仕組みへの切り込みと全体構造把握への視点が乏しいのです。

第二次世界大戦という、生き死にの厳しい状況を経験した年代のある人たちは、短歌は奴隷の文学であるとさえいっております。大和朝廷賛美の鎖を切って、そこからから抜けきれていない、心情の吐露の文学であると言っております。

東日本大震災から、立ち上がろうとしている東北の人々、我々の歴史と文化の奥には、縄文蝦夷の子孫という、被征服民族の血が流れております。これを乗り越えること、それは地域文化価値の根っこにあるものを、国内外の人々と共有することです。

そのひとつが、想いを詠んで東海新報に発表し、評を交換することなのです。これが（教えを国に成す）ということです。

（東海新報記事から）

3月1日（金）の東海新報の第1面には「水産加工でトヨタ生産方式　森下産業が20%アップ　カイゼン思想現場にひろがる」が掲載されている。トヨタ生産方式の合理性は世界が注目しているものである。生産システムの合理性は米国のフォード、クライスラー、GM、ドイツのベンツ社など欧米の自動車産業でで発達してきた。

トヨタは機械による生産工程に加え、人間による調整工程を組み入れてきた。即ち、トヨタの生産工程には合理的機械力の働きに人間の価値意識力が加わっているのである。このことを、しっかりと肝に銘じておかないとシステムは劣化してくるのである。

3月7日（木）の朝日新聞の天声人語は春の杉花粉の到来を川柳を引き合いにして述べている。

〝百人の蕎麦食う音や大みそか（江戸川柳）〟　大晦日にはずるずると音を立てながら大勢で年越しそばを食べていることを詠んだ川柳である。これに、ひっかけて、〝百人の鼻すする音や花粉症（天声人語）〟。花粉症は鼻は予防薬が奏功するも目は苦戦ぎみと述べて、〝目のふちが世界のふちや花粉症（山口優夢）〟と花粉症の同士の作品を引いている。

スギ花粉症は過去に山の他の樹木とのバランスを考えずに、杉を植林しすぎた事と関係があるとされている。世界の砂漠化と中国の黄砂と微粒子の飛来は、人口の増加や農業と工業の過剰生産による自然破壊と深く関係している。これは世界規模の問題、即ち現代文明病の現れである。したがって、この梅下村塾の（読書と教育）と（教え国を成す）を心して読むべきである。